忠谷家と忠谷家住宅

忠谷家は、橋立の北前船主・寺谷家の船頭をつとめ、天保年間（1830-1843）に独立して船主となりました。代々、北前船経営に従事し、明治期には3隻の和船を所有し、西洋型帆船、汽船も導入しました。明治4（1871）年、北海道函館に出張店を開設。道内各地、千島や樺太（現・サハリン）で海運業、漁場経営を展開しました。

忠谷家住宅は、独立後の天保年間に建てられました。橋立に残る北前船主邸の中でも最古級で、主屋は橋立の北前船主型住宅の発展過程を示す貴重な建造物です。平成19（2007）年に加賀市指定有形文化財、平成21（2009）年には、主屋と大正期に増築された離れ座敷、土蔵2棟が国の重要文化財に指定されています。

表構え。忠谷家が天保期に独立後、この土地を入手し建築。家の前には蔵が3棟あったが、現在は2棟が残る。

オエ（大広間）は20畳。主屋奥（写真右手）には、2列で3段6室が置かれる。黒く重厚、素朴な印象のつくり。

右：デイ（オエ奥、2段目）床框はクリ、違い棚はせいろ棚、棚板はケヤキが使用。

左：ブツマ（最奥段）1.5間で簡素なつくり。書院板はケヤキが使用。

当初から瓦葺きでありつつ、外側の斜め天井の構造には茅葺き時代の手法が残る。橋立の北前船主邸の発展過程を示す。

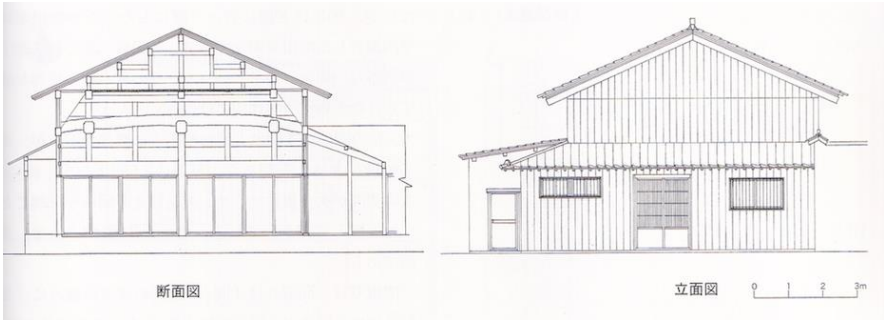
【参考文献】「忠谷家の人々」、『加賀橋立の町並み　伝統的建造物群保存対策調査報告書』（2004年）

■ 制作：加賀橋立北前船ツーリズム実行委員会
■ 令和4年度 観光庁「地域独自の観光資源を活用した地域の稼げる看板商品の創出事業」

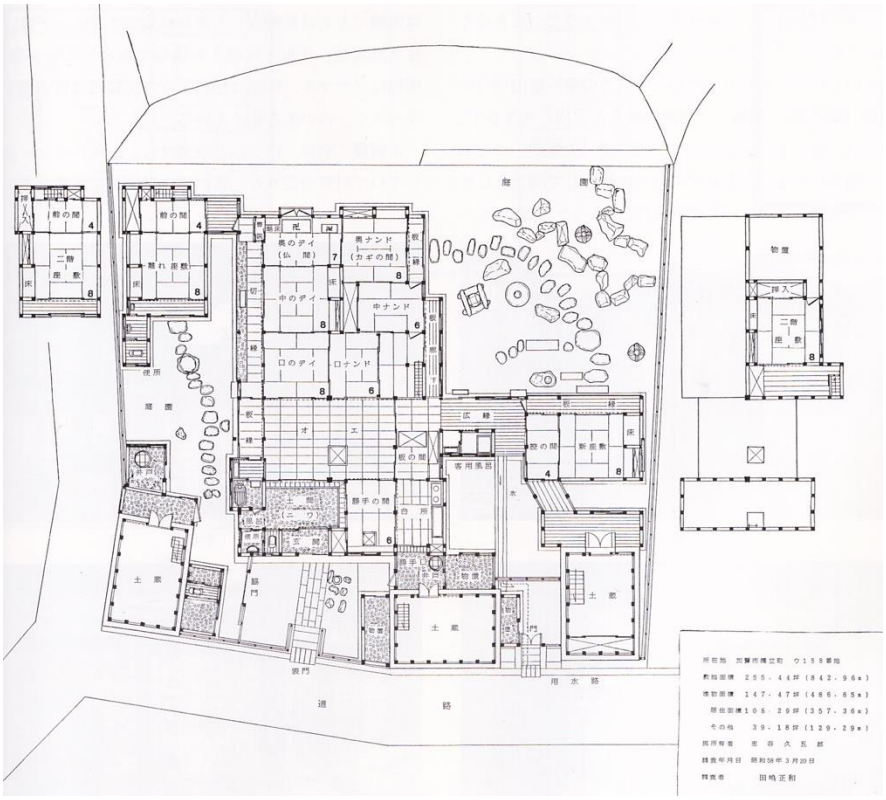
忠谷家住宅

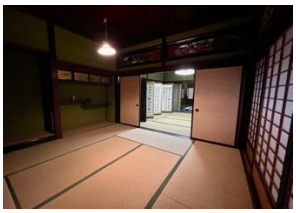
天保年間（1830-1843）の建築。平成21（2009）年、主屋と大正期に増築された離れ座敷、土蔵2棟が国の重要文化財に指定されました。

表構え。



オエ（大広間）20畳。





デイ（オエ奥、2段目）

ブツマ（最奥段）

復元平面図（田嶋正和氏作成、『えぬのくに』北前衆の家③より）

【参考文献】　『加賀橋立の町並み　伝統的建造物群保存対策調査報告書』（2004年）

■ 制作：加賀橋立北前船ツーリズム実行委員会
■ 令和4年度 観光庁「地域独自の観光資源を活用した地域の稼げる看板商品の創出事業」

忠谷家のあゆみ①

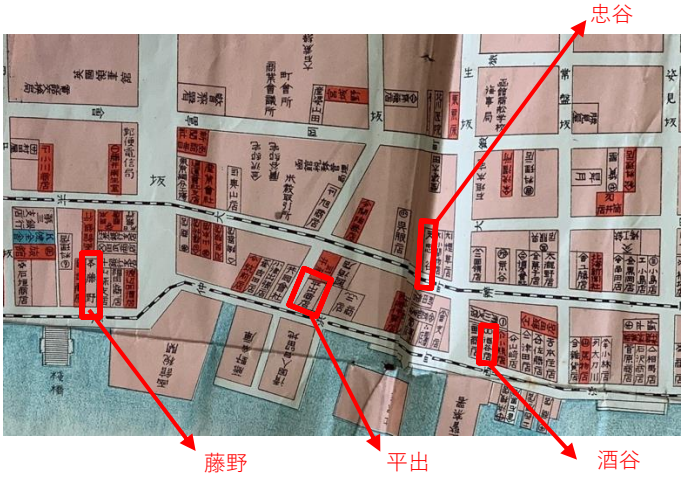
忠谷家の初代久五郎は、安永4（1775）年生まれで、橋立の北前船主・寺谷家の船頭を務めていました。やがて、寺谷源七の娘と結婚し、天保年間（1830-44）に独立して自ら船主となりました。嘉永4（1851）年に橋立で死去するまで、北前船経営で忠谷家を発展させました。

初代久五郎を継いだ２代目久蔵は、文化2（1805）年生まれで、父とともに船乗りとして各地で取引きを行っていました。箱館を拠点に経営を拡大していきましたが、嘉永3（1850）年、父より早く45歳で病死しました。同地に忠谷家の屋号「ニヤマ」の墓が建てられています。

2代目久蔵と３代目の間には十数年間の空白期があります。２代目久蔵の末娘のさ登が適齢期になった際に婿を取るかたちで、３代目久五郎が忠谷家を継ぎました。

左：安政４（1857）年11月、幕府外国奉行の堀織部正御目付、駒井左京の一行が海岸巡視のため大聖寺藩に来た際、忠谷家は脇本陣（本陣の予備宿舎）となった。そのことを示す高札が現存する。

東本願寺函館別院船見支院。忠谷家の墓がある。



上：箱館の忠谷家出張店の位置。周辺には、酒谷家、平出家など、橋立の北前船主、橋立にゆかりが深い近江商人・北前船主の藤野家の支店がある。「函館港名家及実業家一覧地図」（明治30年代、函館中央図書館蔵）

【参考文献】「忠谷家の人々」、『加賀橋立の町並み　伝統的建造物群保存対策調査報告書』（2004年）

■ 制作：加賀橋立北前船ツーリズム実行委員会
■ 令和4年度 観光庁「地域独自の観光資源を活用した地域の稼げる看板商品の創出事業」

忠谷家のあゆみ②

3代目久五郎は、天保10（1839）年生まれ、２代目久蔵の末娘さ登（1848－1825）と結婚し、忠谷家に婿入りしました。3隻の和船で北前船経営を展開し、明治４（1871）年には函館に出張店を設置して海産商を開始しています。明治30（1897）年、病気で死去しました（60歳）。

4代目久五郎は、明治2年生まれ、明治17年に家督を継ぎ、北前船経営、漁場経営を広範に行い忠谷家の事業を拡大しました。明治37年、北前船経営を廃業し、汽船海運業と漁業を中心に事業を転換していきました。大正4（1915）年には同郷の北前船主・西出孫左衛門らとともに橋立村村会議員を務めています。大正10年、金沢で死去しました（53歳）。

5代目平安は、橋立の北前船主・増谷平吉と酒谷長兵衛の養女の5男にあたります。4代目久五郎の長女エツの婿となりますが、エツが早逝したため、三女幸子と結婚しました。樺太・千島等での北洋漁業に進出し、事業を拡大していきました。戦後、橋立に転居し、昭和33（1958）年には加賀市文化財専門委員会の嘱託委員に選出されています。昭和48年、橋立で死去しました（78歳）。主に福井県内で勤務・居住していた6代目の没後、7代目により忠谷家住宅活用の取り組みが進められています。

5代目平安の妻幸子と幼少期の6代目久五郎

4代目久五郎（1869-1921）

5代目平安（1895-1973）は石川県立小松中学校時代（現・小松高等学校）、短艇（カッターボート）の選手だった。軸手は12代目西出孫左衛門（西出悌二）が務めるなど、橋立の北前船主関係者の子弟のチームだった。大正2年撮影。

【参考文献】「忠谷家の人々」、『加賀橋立の町並み　伝統的建造物群保存対策調査報告書』（2004年）

■ 制作：加賀橋立北前船ツーリズム実行委員会
■ 令和4年度 観光庁「地域独自の観光資源を活用した地域の稼げる看板商品の創出事業」

忠谷家の北海道・樺太での活動①：海運業

明治4（1871）年、3代目久五郎の時、忠谷家は函館に出張店を開設し、海産商を始めました。明治19年、函館の商人有志が共同で海運業会社、渡島組を設立すると、4代目久五郎は、取締役の一人となります。明治26年、社名を函館汽船株式会社に改称すると、実質的な創始者である4代目久五郎は筆頭株主となりました。明治初期には3隻の和船（久王丸、久応丸、久徳丸） で北前船経営を行っていた忠谷家は、明治29年には西洋型帆船1隻、汽船1隻も所有するようになり、これらの自家所有船と渡島組、函館汽船の所有船を駆使して漁獲物輸送を兼ねた海運業を展開しました。

北前船経営が転換期を迎える中、明治33年、忠谷家は函館汽船株式会社の持株全てを売却して同社の経営から撤退し、明治37年には北前船経営を廃業しています。その後、忠谷家は、明治44年、合資会社樋口回漕店に出資し、以後、大正8（1919）年まで同社の船を利用して漁獲物を運搬しています。大正10年、4代目久五郎の死後、後を継いだ5代目平安は樺太で漁業経営を継続し、昭和8（1933）年、橋立出身の北前船主・酒谷小三郎が設立した北海モリス勧業株式会社の取締役に就任。金銭貸付業、各種保険代業を展開しました。昭和20年7月、戦況が悪化する中、5代目平安は樺太の漁場経営から撤退し、戦後は河邊石油店の函館営業所代表に就任しました。

【函館汽船の所有船航路】

船名	購入年 乗組員	総トン数	登簿トン数	公称馬力	函館起点の寄港地 （日本海のみ記載）
渡島丸 （木造船）	明治19年 乗組員11名	121.30	75.22	14.13	江差、寿都、岩内、積丹、美国、古平、余市、小樽、雄冬、増毛、浜益、留萌、天売、焼尻、苫前、羽幌、青森、深浦、新潟
北海道丸 （鉄船）	明治21年 乗組員28名	642.74	398.50	87.70	江差、岩内、小樽、増毛、留萌、土崎、本荘、新潟、伏木
北門丸 （鉄船）	明治25年 乗組員22名	694.39	430.53	77.00	江差、岩内、古宇（積丹）、美国、小樽、天売、焼尻、利尻、礼文、稚内、青森、船川（男鹿）、土崎
北雄丸 （鉄船）	明治28年	918.11	569.22	79.50	福島、古平、余市、小樽、利尻、礼文、稚内、青森、野辺地、土崎、船川、伏木
都　丸 （木造船）	明治30年	359.64	222.98	65.40	泉沢、福島、江差、寿都、岩内、小樽、天売、利尻、礼文、稚内、青森、野辺地、船川、北浦（男鹿）、賀茂（山形）、伏木（富山）

【参考文献】山口精次「橋立出身　忠谷・田端家の函館に於ける商業活動」『市立函館博物館研究紀要』（第20号、2010年）

■ 制作：加賀橋立北前船ツーリズム実行委員会
■ 令和4年度 観光庁「地域独自の観光資源を活用した地域の稼げる看板商品の創出事業」

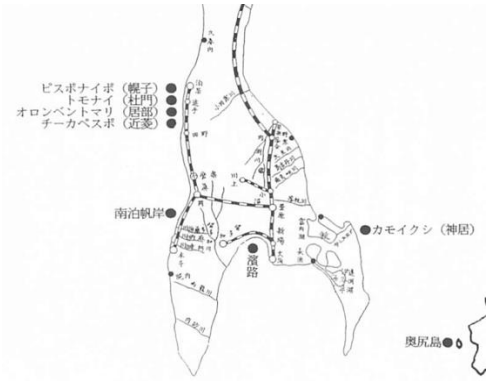
忠谷家の北海道・樺太での活動②：漁場経営

江戸時代中期以降、蝦夷地（北海道）の漁場経営は、場所請負人が担っていました。明治2（1869）年、明治政府によって場所請負制が廃止となり、北海道の漁場経営が自由化されると、多数の北前船主たちが漁場経営に参入していきます。北前船経営を家業としてきた忠谷家も、明治12（1879）年以降、北海道各地で漁場経営を開始しました。

3代目久五郎は、明治12年に根室など、明治21年には奥尻島、十勝大津など10数ヶ統の漁場を経営し、明治26年頃から樺太（現・サハリン）でも漁場経営を始めました。当初は樺太東海岸区のロモーが中心で、明治32年には西海岸に7ヶ統の漁場を経営し、最多となりました。忠谷家はサケやニシンの漁業権を得て、漁獲物を自家の商船で各地に運搬していました。

当時、樺太での漁場経営の拠点は函館でした。給料や漁具、米や味噌・塩、縄、筵などの生活品はいずれも函館で供給されていました。漁獲物の約9割は函館に運ばれ、その後各地に販売されました。忠谷家の漁獲高は、樺太の漁家52人中、上位5人（35.26%）に入る程で、樺太を代表する漁業者の一人でした。

年　代	明治29年	明治31年	明治32年	明治33年
漁場名称	北東海岸区 ロモー	東海岸 カモイクシ	西海岸他 チーカペスポ オロンベントマリ トモナイ ピスポナイポ	西海岸 チーカペスポ オロンベントマリ トモナイ
漁獲高（石）	1,350.00	36.05	4,533.55	43,920.00
漁獲金額（円）	20,665.500	534.074	60,288.629	67,822.710



『樺太水産団体大観付録地図』
（樺太水産会、昭和10年）

【漁獲物の種類】
サケ、マス、ニシン、〆粕、身欠き鰊、数の子、タラ、乾魚、魚油

『露国領薩哈嗹島漁業報告』『露国亜細亜沿岸ニ於ケル本邦人漁業許可一件』『漁業関係報告』『樺太水産彙事』『樺太漁業法規』に基づき作成。

【参考文献】山口精次「橋立出身　忠谷・田端家の函館に於ける商業活動」『市立函館博物館研究紀要』（第20号、2010年）、『加賀ふるさと人物辞典』（2018年）

■ 制作：加賀橋立北前船ツーリズム実行委員会
■ 令和4年度 観光庁「地域独自の観光資源を活用した地域の稼げる看板商品の創出事業」

忠谷家の遺産：着物類

忠谷家には着物、印半纏など、様々な衣類がのこっています。華やかな着物、事業に従事する人たちの姿をいまに伝える印半纏は、忠谷家の繁栄が伺える貴重な遺産となっています。